

関東地方における神社信仰の 地域性と重層性

梅 山 和 代

1. はじめに

地理学のなかで、宗教に関連した現象を扱った¹⁾研究は従来からなされてきているが、千葉、当麻²⁾らの研究をのぞいて、それらは宗教地理学の研究というよりもむしろ集落地理学、交通地理学、そして歴史地理学の研究といった方がふさわしいのが現状である。

本論では、宗教地理学の一試論として宗教の相互作用——競合と併存——、およびその結果でありかつ日本の宗教の特質と指摘される重層性についての地域研究を取りあげてみた。

研究対象は、日本の宗教事情が数々の習合・重層により極めて複雑になっているため、神社信仰に限ることとした。仏教、教派神道、キリスト教等は、日本における発生、伝播が研究しやすいが、常にそれらの根底に横たわり最も日本的な特質を有している神社信仰が明らかにされない限り、それらの正しい位置づけも困難である。また、神社は現在でもお宮参り、七五三、初詣で、祭礼、観光などで多くの人をひきつけており、宗教としての性格は薄れているものの、生活の中に根をおろすだけの長い歴史とそれを支えた人々の熱心な信仰とがあったはずである。歴史的にみれば、神社に関する信仰は、それぞれの時代に政治の影響を強く受けてきたが、我が国において最も古く発生し、その後いくつかの新しい外来の宗教を受容し、またそれらと習合し、時代によって顔つきを変えながらも日本人の生活の傍らにいつもあった信仰である。

本論では、このような神社を中心として展開されてきた信仰生活、信仰行動を「神社信仰」と定義し、まず関東地方の神社分布図を作成し、それによって神社分布の状態、特定の神社の分祀圏の広がり、分祀圏の競合と併存、重層の関係を考察し、さらに氷川神社分祀圏内の地域を調査して、

法人神社と小祠、境内社、有名大社寺の講との重層の状態の考察を試みた。

2. 神社信仰の地域性

(1) 神社の分布

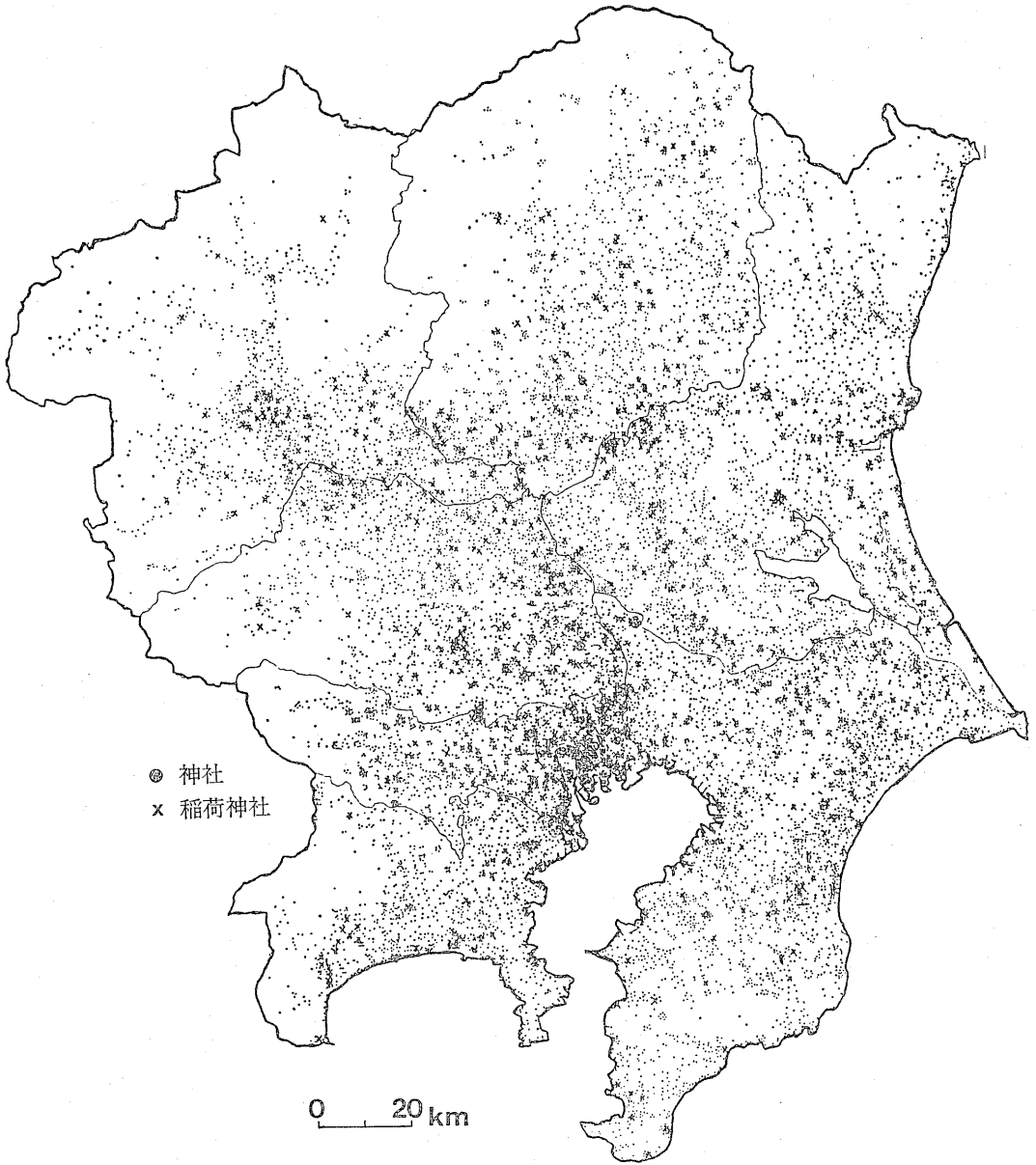
関東地方の1都6県には、約14,000の法人神社があり、そのうち約9割にあたる13,268社が神社本庁に所属している。各県の宗教法人名簿をもとに神社本庁に属する神社の分布を示したものが図1である。この図からは、関東地方の神社は平野部では、ほぼ一様に均等な分布を示し、山間部にはいと河川の流域に沿って分布がのびていること、また、平野部では近世にすでに大都市として発展していた江戸を中心とする地域に集中的な分布があることが読みとれる。

神社の設立は江戸時代までにほぼ完了し、明治以降は一般の神社は整理される方向にあったが、図1の明治以降の法人神社1社に対する近世末の人口は335人と推定される。平均27%減少したとされる明治39年からの神社整理の対象となったものは法人神社より規模の小さい無格社が多かったと考えると、江戸時代のムラ（だいたい現在の大字にあたる広さ）を1村50戸人口約300人とみて、だいたい1村に法人神社1社が分布していることになり、村ごとに氏神として祀られていた状況が想定される。

また、この神社分布は都市に激しい集中を示す現在の人口よりも近世末の人口により相関していると言える。

(2) 社名による神社分布

図1の神社分布図を社名別にみていくと、ある地域に集中的に分布している神社（氷川神社、鹿島神社など）と、関東地方全体に分布している神社（稻荷神社、八幡神社など）との2通りがあることがわかる。神社名は途中で変化しているケースもある⁴⁾ので、神社名によってある神社の影響圏



資料 各県宗教法人名簿より作成。ただし群馬県は群馬県神社名簿（群馬県神社庁）による。

図1 関東地方の神社分布

を想定するのは難しい。しかし、本論では一応、自由に社名を選べるなかで、ある特定の社名が選ばれた背景には、きちんと分祀が行われたか、村民なり為政者、または祭祀者がその神社を信仰するなど係わりが深かったか、御師の強い勤めがあったと考えて、社名による分布を分析していきたい。

地域的な分布を示す主な神社の分布の範囲を示した図（図2）とその神社の概要（表1）、また全域に分布する神社は稲荷神社のみ図1の分布のうえに×印で示し、表2にはその他の神社も含めて概要をまとめてある。

これらの図表から次のようなことが言える。全域に分布する神社は、中世以降、御師や修験者に

表1 地域的な分祀圏をもつ神社

神社	本社	氏族	修験	御利益など	講	その他
氷川神社★	大宮市高島町	出雲系		キツネおとし		武蔵一の宮、出雲の簸川(肥川)から社名元荒川以西に分布
鷲の宮神社	鷲宮町(埼玉)	出雲系				土師氏による創建
香取神社★	佐原市(千)	中臣氏		武神		下総一の宮、東北にも分布
鹿島神社★	鹿島町(茨)	中臣氏		武神		常陸一の宮、東北にも分布
武尊神社	(武尊山)			土地開拓, 産業守護, 成年式の登拝		
赤城神社★	赤城山大沼		○			磐座, 山麓の村では死者に会いに行くと呼んで登拝する。
榛名神社★	(榛名山)		○	火伏せ, 雨乞い, 霜害虫害よけ, 風よけ, 雷よけ	関東一円に分布	江戸時代の配札圏は, 新潟, 会津にまで及ぶ。
二荒山神社 日光神社	日光市		○			
星宮神社	二荒山神社		○			星辰信仰
金鎖神社★	神川村(埼玉)					神体山, 児玉党の総鎮守 九郷用水の守護神
長良神社 長柄神社				農業神		人柱伝説が残る→洪水から生活を守る。
大杉神社	桜川村(茨)			難船救護 雨乞い, 疫病よけ	(アンバ様)	
水神社						洪水常襲地域
雷電神社				雷よけ, 作神, 雨乞い		
箒根神社	(麓山)					
温泉神社★	那須町			医薬禁厭		那須氏による勧請で分布
磐裂神社 根裂神社	粟野町及び鹿沼市					
鳥見神社						千葉氏による勧請で分布
麻賀多神社★						潟の多い地域又は麻の産地だった千葉氏による分祀

注) ★は延喜式内社。この他に高麗神社・山祇神社・三島神社なども地域的な分布を示している。

よって信仰地域が広められた神社、または源氏などの有力者によって保護された神社であり、関東地方だけでなく全国に分布をひろげている。地域的な分祀圏を持つ神社のなかで分祀圏が比較的大きいもの(氷川神社、鹿島神社、香取神社)は、いずれも古代にその地域を開発した氏族と深い関連のある由緒を伝えている古社であるが、全域に

分布する神社のように、中世以降、御師、修験者の組織がなされず信仰圏がさらに拡大することはなかった。小さな分祀圏をもつ神社は、中世豪族に保護されたもの(金鎖神社、鳥見神社)と、自然神としての性格を強くもち、その地域の生産活動に関係が深いため、地域住民から祀られたもの(榛名神社、長柄神社)とがある。古社の代表と

表2 全域に分布する神社

神社	本社	祭神・氏族	御利益等	講	その他
神明神社	伊勢神宮(三重)	天照大神		伊勢講, 代参, 御師が来る. 金融機関としての機能.	伊勢神宮の御厨に多い. 明治の初め, 名前のなかった小祠に神名と名付けた例が多い.
熊野神社	熊野三山(和歌山)	出雲系	武工の崇敬		熊野修験道によって全国に分布(先達, 比丘尼による宝印の領布). 千葉県に多く分布.
諏訪神社	上社(諏訪市) 下社(下諏訪町)	建御名元神	武神		
八幡神社	宇佐八幡宮(大分) ↓ 石清水(京都) ↓ 鶴岡(神奈川)	誉田別尊(応神天皇)と神功皇功	武神		9世紀以前, 宇佐から分祀 9~11世紀, 石清水から分祀 12世紀以降, 鶴岡を主として宇佐石清水からも分祀
稻荷神社	伏見稻荷(京都) 豊川稻荷(愛知) 笠間稻荷(茨城)	宇迦之御魂神(食物の神)	農業の神 ↓ 商業の神	(オビシヤ講)	江戸時代, 農家・商家の家敷神として敷地内に多くつくられた(現在も小祠として残る).
浅間神社 富士	富士山本宮(富士宮) 浅間神社(静岡市) 浅間神社(山梨県一宮町)	木花咲耶比売命		富士講, 富士山登拜 ↓ 幕末に教派神道が発生(扶桑教, 実行教)	各地に富士塚がつくられる.

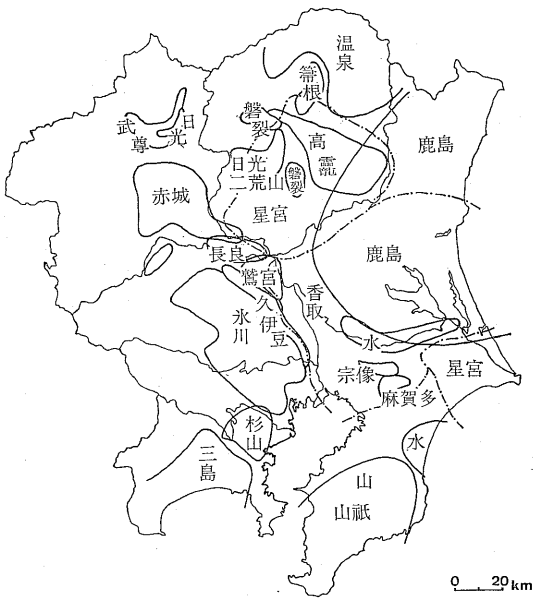


図2 社名による神社の地域的分布

される式内社のなかでも、古代の氏族や中世豪族の支持を受けておらず、御師の活動もなかった神社は、分祀圏を形成していない。

以上のことから、創設時の性格が氏族の祖神であれ自然神であれ、分祀圏が広がるためには、祖神として血縁集団の、自然神として地縁集団の奉斎がまず必要であり、さらに中世以降、全国的に活躍する武家の保護を受けた神社、神社内に御師が発生し信仰伝播を行った神社がより広い分祀圏を形成していったと考えられる。ただし、御師による信仰圏の拡大は、神社分祀という形だけでなく、講の形で広がっている場合もあり、中世以降の宗教事情は複雑なものとなっている。

3. 神社信仰の重層性

法人神社、小祠、境内社、講など神社に係わる信仰の重層について、氷川神社の分祀圏のほぼ中央に位置する埼玉県富士見市、志木市を調査地域として、具体的に考察をしていきたい。

調査地域とその周辺における氷川神社の分布と伝えられている創設に関する由緒、時代を図化したものが図3である。氷川神社の本社は埼玉県大宮市高鼻町の氷川神社であるが、この本社からは、

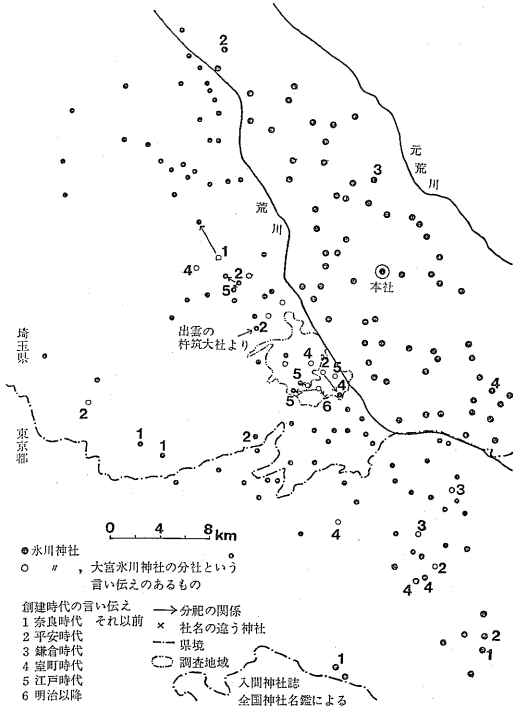


図3 水川神社の創設と分祀

表3-1 法人神社の境内社(富士見市)

法人神社	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
境内社	榛名川	水川	諏訪川	水川	八幡川	水川	阿蘇	上南	水川	八幡川	水川	水川
稲荷神社	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
雷電神社	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
八幡神社	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
八雲神社	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
牛頭天王社	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
神明神社	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
巖島神社	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
琴平神社	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
大六天王社	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
疱瘡神社	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
その他	富士、 藤塚1)				御岳		八坂、 小安山	須賀	日枝、 江島	庚申	浅間、 天神、 花園	

資料：入間神社誌などによる。

注1) 境内社の稲荷神社には稲荷社3社が合祀されている。

2) 境内社の稲荷神社には水川・神明・稲荷・八雲の4社が合祀されている。

表3-2 法人神社の境内社(志木市)

法人神社	13	14	15	16	17	18	19
境内社	水川	敷島	天神	水川	浅間	水川	水川
稲荷神社	○	○	○	○	○	○	○
八幡神社	○	○	○	○	○	○	○
八坂神社	○	○	○	○	○	○	○
伊都岐島神社	○	○	○	○	○	○	○
琴平神社	○	○	○	○	○	○	○
御岳神社	○	○	○	○	○	○	○
浅間神社	○	○	○	○	○	○	○
その他	大鷲、 護国				成田山	水天宮	

資料：志木市郷土誌などによる。

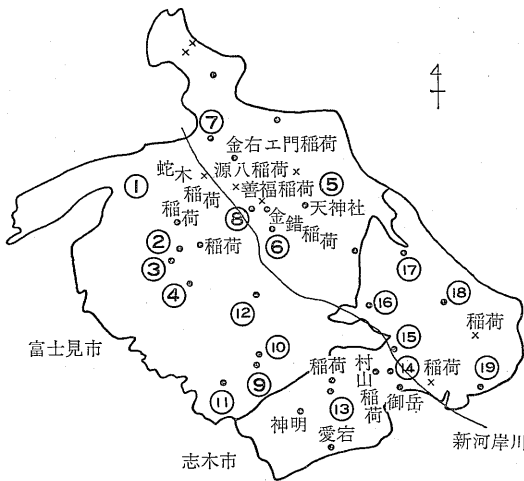


図4 調査地域における神社・小祠

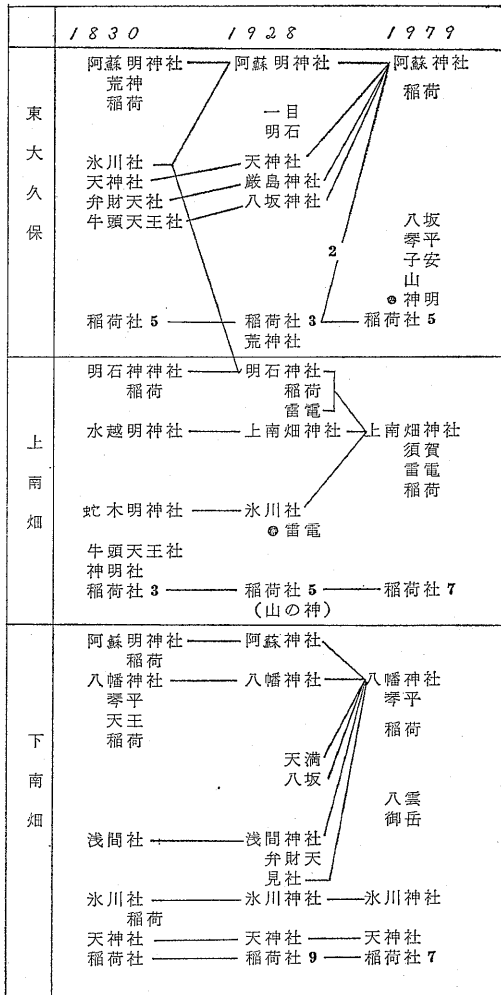


図5 南畑地区の神社の消長

1行さげてあるのは境内社、黒丸は合祀社。新編武蔵風土記稿、南畑村沿革史、入間神社誌による。

遠い位置にありながら古い時代(奈良・平安時代)に創られた神社がある。所沢市の中氷川神社は、本社とともに式内社となっているので、10世紀までその歴史をさかのぼることができる。分祀圏の範囲はおそらく平安時代頃までに決まり、それ以降はその分祀圏のなかで、村分けなどによる分祀が行われ、数が増えて密度が濃くなってきたと考えられる。しかし、本社が御師等を組織して中世以降活発な布教活動をしなかったために、分祀圏の大きさが広がることはなかった。

調査地域の神社と小祠の分布は図4に示してあ

るが、この地域で法人神社の約半分が氷川神社である。法人神社はそれぞれ氏子区域を分けており(ただし⑨と⑩は同じ地域を氏子としている)、大字程度の集落の氏神としての機能を果している。氷川神社以外の法人神社は、広い分祀圏を形成している有名大社と同名の神社(八幡神社、諏訪神社など)が多く、いずれも「新編武蔵風土記稿」に記載されているので、近世初期までに勧請されていたと考えられる。氷川神社の分祀圏内でも近世初期頃までに勧請されれば、集落の氏神として祀られたのであろう。図4の小祠のほとんどは稲荷社であり、他に神明、御岳、愛宕などがある。表3をあわせてみれば境内社も稲荷が圧倒的に多く、神明、八坂、八幡がそれに続いていることがわかる。これらの小祠、境内社は18世紀創設と伝えられるものが多い。

法人神社、境内社、小祠は歴史的にみてどのような変遷をたどってきたのであろうか。富士見市南畑地区の神社の消長を図化したものが図5である。1830年以降、この地域の神社は、小祠は14社増えているが、大きな神社に統合(合祀又は境内社としての吸収)されているものも多く、たいへん流動的な状況を示している。しかし、各集落(大字程度)の産土神である現在の法人神社は、名前を変えているものがあるが、存続している。消長の激しい境内社、小祠は広大な分祀圏を持つ有名大社の神社が多い(稲荷、八坂、天満、御岳神社など)。小祠としては稲荷社が特に多いが、富士見市、志木市では、字程度の大きさの集落の氏神として、これらの稲荷社を祀っている。それらの中には屋敷神から発生したと考えられるものもある(志木市の村山稲荷は屋敷神から同族の神、そして地縁集団の氏神へと変化していったと考えられている。地縁集団の神となったため、権威づけのためわざわざ京都の伏見稲荷から分祀が行われた⁶⁾)。これらの稲荷社はいずれも、田畑の一部や集落のなかの数m四方の狭い土地に木立ちに囲まれた小さな祠として祀られている。稲荷社の氏子はそれぞれオビジャ講を構成し、初午などの行事を行っており、住民の側からみると歴史的には法人神社より身近な氏神としての機能を果してき

表4 富士見市の講

講	性 格	行	事	御 師 の 活 動	そ の 他
部 落 単 位・ 全 戸 加 入 の 講	オビ ン ャ 講	農作業の前に 日待ち (柳田による 田の神迎え)	2月初午の日にお日待をする(飲み食いが主). 稲荷社の幣束を切りかえ, 神主をよび祝詞をあ げる. 稲荷社には, おこわ, 油揚げ, めざし, 野菜の煮しめを供える. 子供も日待ちをした.	各部落内の稲荷 の講であるため 御師はいない.	農地改革前は, 稲荷免 という免田があり, そ こからの収益で行事を 行った. 千葉・茨城で は2月初午の日, 弓を 射る神事も行う.
	御 岳 講	筒 粥 神 事	4月に, 東京御岳山の御岳神社に代参, その年 の農業についてうらなってもらふ. 収穫後の日待ちで, 翌年の代参者を決め, 代参 者になった人が, 以後, 1年間の行事をとりし きる. 現在でも, 毎月1,000円をつみたて代参 を出している.	11~12月に配札 に来る. ↑ 初穂として1軒 あたり米5合~ 1升	代参が一巡すると神楽 を奉納する部落もあ った. その場合, 白米を 1斗6升, 神社へ持っ ていく. 近隣市町村で は“初山参り”をかね るところもある.
	大 山 講	初 山 参 り	15才になると, 春の代参の時, 代参人とともに 相模大山へ行く. 夏に行く部落もある.	暮れに配札に来 る.	代参の帰りに江の島, 鎌倉を見物.
有 志 に よ る 講	1) 榛 名 講	病虫害を防ぐ 雨 乞 い	4月初めに代参, 札をうける. 札は田の水口に たてた. 境内の砂をもらって各戸に配る習慣も ある(虫除け). 日での年は, 臨時で出かけ榛 名湖の水をもらってきて, 皆で水あびをする.	伊香保に一泊す るが, 定宿はき まっていない.	
	2) 榛 名 講	豊 作 家 内 安 全 雨 乞 い	2月10日に代参, 祈禱講(天災よけ, 五穀成就・ 家内安全の祈願)をし, 神札と供物をうける. 水 不足の時は, 境内御水足池の水をもらいに行く.		氏子130戸に対し, 講 社員1,000戸, 川越, 練馬にまで分布

注1) 上州榛名山, 注2) 勝瀬の榛名神社

たといえる.

調査地域の講については表4にまとめてあるが, たくさんの講が組織されている. それらは, 現在字程度あざの集落を単位とし全戸加入している講と, より広い地域の有志によって結成されている講との2種に大別できる. 前者は, 住民の生活や生産活動に深く係わっていると考えられるが, この地域ではオビンチャ講, 御岳講, 大山講がその代表である. オビンチャ講は集落内の稲荷社の講であり, 2月初午のお日待ちは子供の行事も含めて昭和30年代初期頃までは盛んに行われていた. お日待ちにかかる必要は稲荷免という免田からの収益で賄われていた点が他の講とは異なっている. 柳田国男はこの初午の行事を田の神迎えの行事と位置づけている.

御岳講は東京御岳山へ代参する講であり, これ

もその年の収穫を占うという点で農業との係わりが深い. 代参は現在でも行われており, また冬には御岳山の御師が配札にやってくる. 御岳講は, 富士見市の一部や朝霞市などでは初山参りの講としての機能を持っている例もある.

大山講は, 神奈川県大山の阿夫利神社の講であり, この地域では15才になると共同体への加入を認める初山参りの行事として代参が行われていた. 一般に大山講は, 雨乞いの神であると言われているが, 関東地方全域に組織された講をみると, 大山に近い地域(相模川流域など)では雨乞いの山として, 東京都心部では商売繁昌の神として, そして埼玉県南部では初山参りの山として講が組織されている. 同じ神社の講でも地域によって異なる御利益の対象として講が分布していることが指摘できる.

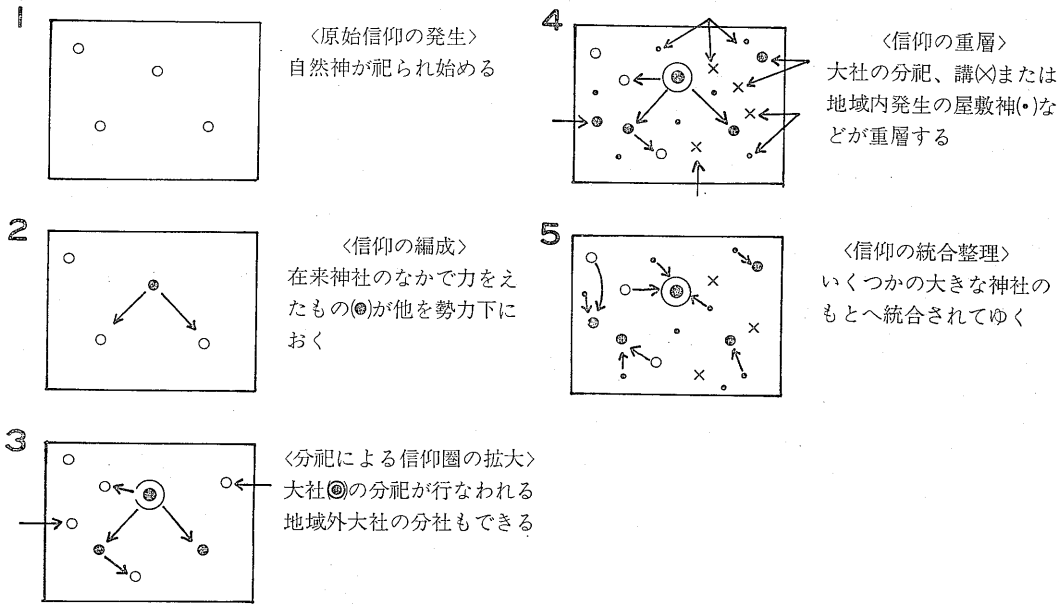


図7 一地域における神社信仰の発展・重層

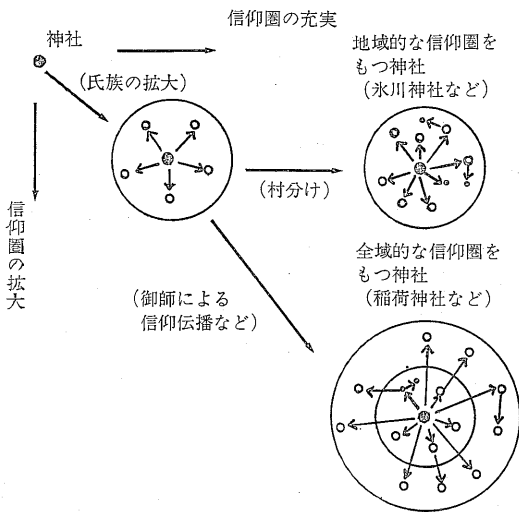


図6 信仰圏の形成

農業にとって雨は重要なものであるが、調査地域で雨乞いのために組織されている講が、上州榛名山の榛名講と富士見市勝瀬の榛名神社の榛名講、そして長野県戸隠神社の戸隠講である、いずれも有志により結成されている講である。上州榛名山の榛名講は、虫除けの御利益もあって考えられており、病虫害を防ぐ点で農業との係わりが深い。代参講であるが、榛名山での御師は特に決まっ

ならず、かつては代参した時は帰りに伊香保で一泊し芸者をあげて遊ぶなど遊興的な面も強かった。勝瀬の榛名神社の講は、氏子130戸に対し講社員が北は川越市、南は練馬区まで約1,000戸分布している。雨乞いに関して上州榛名山の講と似ている面があり、本来は榛名山から分祀されたのではないかと考えられるが、現在は全く別の講として組織され、両方に加入している家もある。戸隠講は富士見市全体で約50戸が加入している講である。

有志によって組織されている講には、他に商人を中心とした富士講、雷除けの御利益があるとされている雷電講などがある。

4. 結論と課題

以上のように神社の側から分祀圏の拡大がどのように行われたか、住民の側から様々なレベルの神社信仰がどのように重層しているかの二方向からみてきたが、まず、分祀圏の拡大をモデル化したものが図6である。ある神社の信仰が広まっていく時、分祀圏は圏の大きさが拡大するとともに、分祀圏内の神社数が増加する(分祀圏が充実する)形をとっている。分祀圏が全国に及ぶか、または

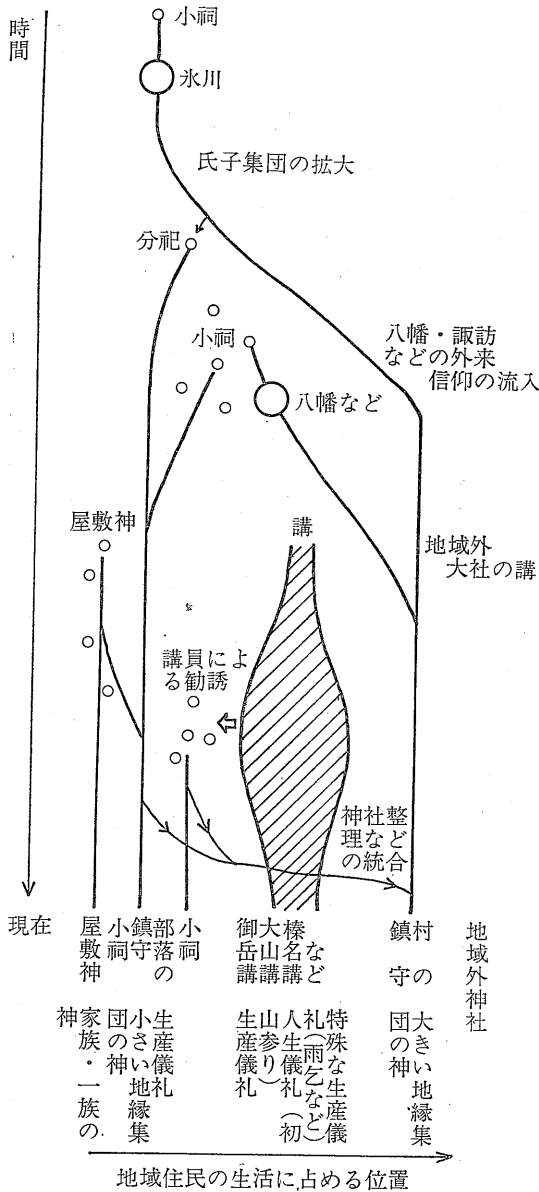


図8 住民の生活のなかにおける神社信仰の変遷

講という形で信仰が広められていくかを規定する要因については、今後の研究が必要である。

ある地域における神社信仰の歴史的变化を示したものが図7である。本論の調査地域である氷川神社の分祀圏の場合、2の時代までに氷川神社の影響を強く受けた地域になったところへ、3の時代に八幡、諏訪神社などの外の地域の大社の分社

ができ、さらに4の段階で屋敷神や講が発生し浸透していく。4と5は同時進行すると考えられるが、たくさん的小祠ができる一方で、整理されていくものもあり、特に明治39年からの神社整理で小さな神社は大きな神社に統合されていった。

図8は、神社、小祠、講が地域住民の生活のなかでどのように重層化しているかをまとめたものである。一番小さな集団(家、一族)の神としての屋敷神、小さい地縁集団(小字程度の集落)の神である小祠(稲荷社が多い)とその小さな地縁集団によって営まれている農業生産と関係の深い講や初山参りの講、そして大きな地縁集団(大字程度の集落)の神としての法人神社があり、さらにその外側に初詣でや七五三、観光などで訪れる遠隔地の有名大社が位置している。

本論では神社を社名によって分類する方法をとったが、この方法のみによって住民の信仰生活を探ることには無理がある。神社信仰をさらに考察するためには、祭神の機能による分類も必要であるし、またさらに大きな視点から、仏教、教派神道、キリスト教、新興宗教といったマクロな分類による地域性、重層性を明らかにしていくことが今後の課題として残されている。

注

- 1) 千葉(1977)
- 2) 当麻(1958)
- 3) 高橋(1971)より算出。
- 4) 本論の調査地域で社名を変更した神社がある(図5)。
- 5) 延喜5(905)年に撰出された延喜式神名帳に記載されている神社で古社の代表とされている神社のこと。全国で2861社(祭神3132座)ある。
- 6) 志木市教育委員会(1978)
- 7) 柳田国男:『山宮考』

参考文献

茨城県総務部(1974):茨城県宗教法人名簿
 入間都市連合神社誌編集委員会編(1971):『入間神社誌』
 内田賢作(1974):『埼玉県旧新座部の民俗——志木・新座・朝霞・和光——』

神奈川県総務部 (1968) : 神奈川県宗教法人名簿
群馬県神社庁 (1978) : 群馬県神社名簿
埼玉県総務部 (1978) : 埼玉県宗教法人名簿
志木市教育委員会 (1978) : 『志木市郷土誌』
全国神社名鑑刊行会 (1977) : 『全国神社名鑑』
当麻成志 (1958) : 丸山教団の土着化過程について,
地理学評論31-8, pp.
高橋梵仙 (1971) : 『日本人口史之研究 第1』日本学

術振興会
谷沢熊次郎・岸伝平 (1955) : 『南畑村沿革史』
千葉県総務部 (1973) : 千葉県宗教法人名簿
千葉徳爾 (1977) : 『地域と民俗文化』大明堂
東京都総務局 (1969) : 東京都宗教法人名簿
栃木県総務部 (1970) : 栃木県宗教法人名簿
内務省地理局 (1884) : 『新編武蔵風土記稿』
柳田国男 (1947) : 『山宮考』筑摩書房